

Centimetres

Kodak  
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

3/Color Black

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

繪本自來也說話

前編

五

遠 13  
1910  
5





報仇うきつら 自來也よき 說話卷之五  
奇談きだん

武江

感和亭鬼武著

高喜齋校合

五十嵐曲いそがし 八幡逢やまはた 奇怪くわいがい 併いっしょ 異人いじん 遠死とんじ 靈たま 糸いと

單識曰たんにし 柔能制剛じゆうにんぎやう 弱能制強じやくにんぎやう 柔者德也じゆうはとくなり 剛者賊也きやうはぞくなり 弱者人之所助じやくはひとのたすけ 強者人之所攻きやうはひとのせう 柔有所設じゆうはしよせつ 剛有所施きやうはしよせ 弱者所用じやくはしよよう 強者所加きやうはしよか 兼此四者かみしよしよ 而其宜制そのあたふ されど鹿野苑かしのえん 軍大夫ぐんたいふ 分略ぶんりやく をとりて大勢たいせい 於監神おのりかみ と道小みちせう 一ひと 茲西天門こゝにさいてんかど の奇物きぶつ ありて身子みみ あり玉たま もありされば是疾こゝろ 子影こゝろ を離はな し漸やがて 吳賢ごけん 村むら を道みち 水みづ 寺てら 峰みね 江え 登のぼ 苦くるしみ を越こ 縁ゆかり 子こ 人ひと 家いへ ありて

自來也說話卷之五上

三

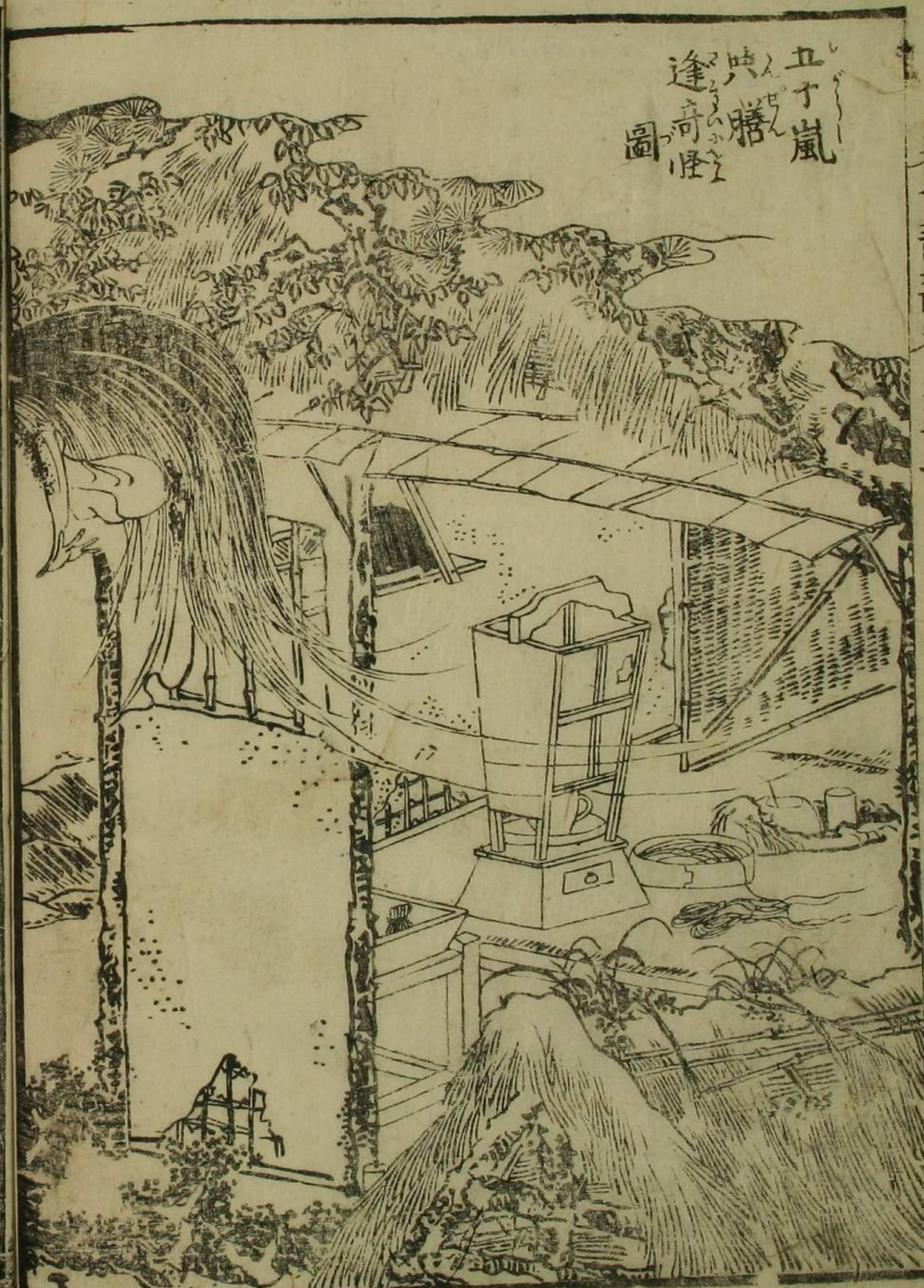


非出日暮ゆきを二軒乃草屋小到一夜の宿をとりてかたやと  
内の勤耕を被てあやふしに目あれぬいと美鶴女は物たのりた  
坊續くあやふしにあはれむとていへていへて道暗速し行暮ぬれ  
路者一夜北高城報志あれと青あふ聲に那女其証奉ふと終  
てくきあれと通しをいへとあやふし軍大夫喜悅悦くちふりて那  
婦人とおとあはれ身只這若奈何と若くは女とてくく身源ちか  
妻の衣重めて軍大夫をさるるるる懼れおとちりてさく  
睡りけやあ軍大夫何国に逃歸くともさるる我身は子洲海に侶吉  
美鳥子仇を討せむとてあやふしとていへる聲さるる緞拈く家朝おさるに  
遠らむ軍大夫性懐作天あ表のまへ馳出れば白あけ侍とさるる

喜樂節と源を命が惣身は紅あ源後及中方子揺乱し西眼鏡は  
如く子時開刀剣を輪してみ方に立別れやも水軍大夫はたはんに  
有念おさるるおとけりて秋何所子遠くあやふしとてあやふしとて  
呼つるあやふし流石の鹿野苑を流し流し流し流し流し流し流し流し  
腰紐延後流多ゆ子雜拂へいれあやふし流し流し流し流し流し流し流し  
はるるあやふし山中の林はるるあやふしあやふしあやふしあやふし  
夜ふあやふし山路を踏りけ指次何平路をさるるあやふしあやふし  
逃入るあやふし何れあやふしあやふしあやふしあやふしあやふしあやふし  
身の毛余まてあやふしあやふしあやふしあやふしあやふしあやふし  
当途をりてあやふしあやふしあやふしあやふしあやふしあやふし



五十嵐  
 典膳  
 逢奇怪  
 圖



新入つぬれを軍大夫半島力と諒々那光りを眼蓋に路をた所を  
 岩を傳へ木根根こつた所驛を幸目と做し後所道附しが  
 復た怪れ住家おちやと木の間より差眼が岩洞乃中一箇の道を  
 うつて彼をうす神火を戦し香を焼書と看るさぬ山の中に住  
 別し勤静なる人と六人さされども何程事わくと想ひ  
 避靜行と例子立奇言ゆい申さんとつらふ那其人軍大夫を觀て  
 ころころ汝者素何して夜中にかる山路を到りを世に城後の國  
 妙香山の絶頂ありて容易人の通ふを此所を此山更汝乃  
 相貌をえるに死靈の祟ありといふゆれを人を過し者あるを  
 素名品所持做といふも遂中をせしれんや汝が命をば其いと

星を指する一言り軍大夫大子警に實に君を天神ある所を尋ねて  
 奇怪お出逢ひ初路の宿に止しこのふさやうが言ふ人の道徳をうり  
 音字の難を避玉ふは天恩死んとも忘れりいと他平身して  
 旅のわが那其人申や汝素稜馬の音とを看つれば早も馮成  
 刃捨んも不便あり一旦の難は移はせんとて路をとりて下山  
 再び這手に到る事あれと申し天子向つて呪文を唱へ堂々とて  
 虚空を拂ふと之ぬれを岩洞の外に散らさるるあおは惜や其人の  
 即あわむ世切ハ見ぬし一歩の空とさる懼れ越青こそ手ある  
 聲のやうを軍大夫ハ驚愕端ありて其人の目今ハ汝が身の上はか  
 好く幕子ありとて老早此を立退よ早も山子あるとて戦

皇朝世言卷之五十一

他子語くは汝が命を不目して候へば死すべしと  
教子後し九津做し一那岩洞と立出れを疾東雲のひかりしか  
出と吹来る風を連率多し山崎雲を傳ひ見上る岩屋も看さざり  
猿忙軍大夫一程の路を求藤城はを逃下り居

自來也於妙香山学妖術併萬里野破魔之助武者終行条

鹿野苑軍大夫山上を逃行後夜はのくと明渡れとをとも山中  
鳴動一政平雲四方に雷震しく閃光さる濤地その  
中に一の岩根小腰打掛する六十六部金剛杖小両半をうけ山上を  
眺付おごりせし観る曲者客を満く此方より一個し士  
旅の象客み武者草鞋小高敷名を立上り同く山上斜眼法

動靜あはげふくくるまのふを峽その海より那兩個の象がよ  
そはに躲きそ観へ分び権ありてそまきも晴くさる山空へ  
那岩洞と眼當し做り躑躅六部れ曲者遙に看下以前の異人  
忽然と岩上よりあらわれ宇を以て謂いつくは這子到る吊奇術と  
早少意と法かまて悟りおれは益城の首領を積悪乃自來也や  
知ある上り秘法ハ不饒をたご成使と云々天晴義氣あは  
志少少を當一術を授げり前面来とりれを自來也大に感下  
入りおとす怪有乃大人我荷も某城使の首領自來也さて  
遙の山峯より觀くはわが一個の士は何をを教諭すといふけ  
を震動雷電閃く光景一奇術を行ふ人として看極めたり



いづれ一人遠  
死の靈  
圖

自序七言可卷之五

幼くして術を清修しつゝ家貧なり老早も夫と知り在れ且其後其  
 長くる事迫言に不慮不審さよ何年一術ありとも按揚ふ其か  
 欣悦何ら茲ふ不却と云を修く其身を那まらん打點自來也の  
 才を弄せ指を以呪文を思ひ世一術を以味方とめづり  
 この従ひ千方里を備も世々を掌中子あて之ん中  
 其人を想ひよとて云を指く時を以る事来る身術の  
 一ツ這を世子傳ふも老早世物を立寄りて予に贈りて  
 りの事を必く他子河よよ復世術を消ん中ら小蛇とい  
 ども蛇女血吸を手中に酒と記す多身術ハ其を奪ふこと  
 傳自後其松野子姓傳立同以前之士信はずはくる報蟻此

幻術マジックられお少くしと家貧武士と石堂家の子あてる万里野破魔之助  
 保義タカヨシ武術修行の路中國へ去る盗賊自來也異人ありと  
 夫生捕ふ如く一糸んと立寄人執看ありも異人が呪文を  
 以て二個乃客家を何国とも入るるを奪ふ事

自來也幻術集小賊併各加邑晋藏家抜入糸

去程に自來也と妙香山あり異人出遭妖術を以て先冥東へ  
 趣んと上徳の国小幡に造り子到りて近來乃金子にせしむ那  
 異人子傳り術を以て先小賊を集めて一衝做くと名ある小賊故意  
 想ひ手中に呪文を以て掌中を以て四方を招ば不審や現に散乱  
 盜賊共不目して是所来る家諸國にある事あり何をもとめぬ





自來也  
名加村  
晋藏家  
挿入圖



河内五郎



自來也

九

決つては、一遣ひとる何程の事らんと小賊子ナリ那海一めと  
 解、鏡ハ晋美ハ千金さういふせ、這きて石見のふるや、去来流、  
 せつとゆと指し、出せむ、這也、年一追而返、辨由さんと小賊子、  
 ころころとせ、驚くこと、晋美、呼止、浪士、女、難ゆとあり、故  
 因、金を、用之、遣せども、借用とあり、う、詮、之、徳、保、れ、よ、ゆ、  
 勇、之、の、言、子、打、點、ら、れ、ま、り、  
 紙、筆、取、奇、自、を、も、て、後、日、子、返、河、做、屋、一、と、千、金、お、預、け、入、り、  
 姓、名、認、ん、花、押、記、茲、と、ら、る、自、来、也、小、賊、延、連、を、帰、る、さ、れ、  
 此、名、加、色、晋、美、を、代、と、富、貴、の、家、あ、る、り、自、来、也、が、自、筆、流、文、子、孫、  
 今、持、傳、く、今、に、殘、つ、と、や、の、へ、ま、り、

勇侶吉郎逢自來也 併天眼磁、法興夜、从嵐相撲、糸

自來也、晋美、家、あり、千金、を、お、預、け、ハ、幡、山、子、お、預、け、り、  
 侶、吉、郎、と、い、ふ、想、ひ、也、一、秋、枝、流、一、到、刻、信、は、星、羅、山、に、  
 世、に、あ、り、し、や、術、を、ひ、く、指、看、ん、急、を、  
 喝、ん、美、術、を、ひ、り、子、一、兩、目、を、  
 到、り、し、ふ、お、ひ、に、し、事、を、  
 自、来、也、は、後、に、  
 浦、れ、其、仇、に、報、ん、と、所、に、  
 我、も、推、津、家、へ、  
 二、れ、と、悔、且、鹿、野、充、軍、太、丈、も、  
 深、を、  
 始、  
 自、来、也、も、  
 鹿、野、充、軍、太、丈、も、  
 相、見、  
 人、相、  
 者、

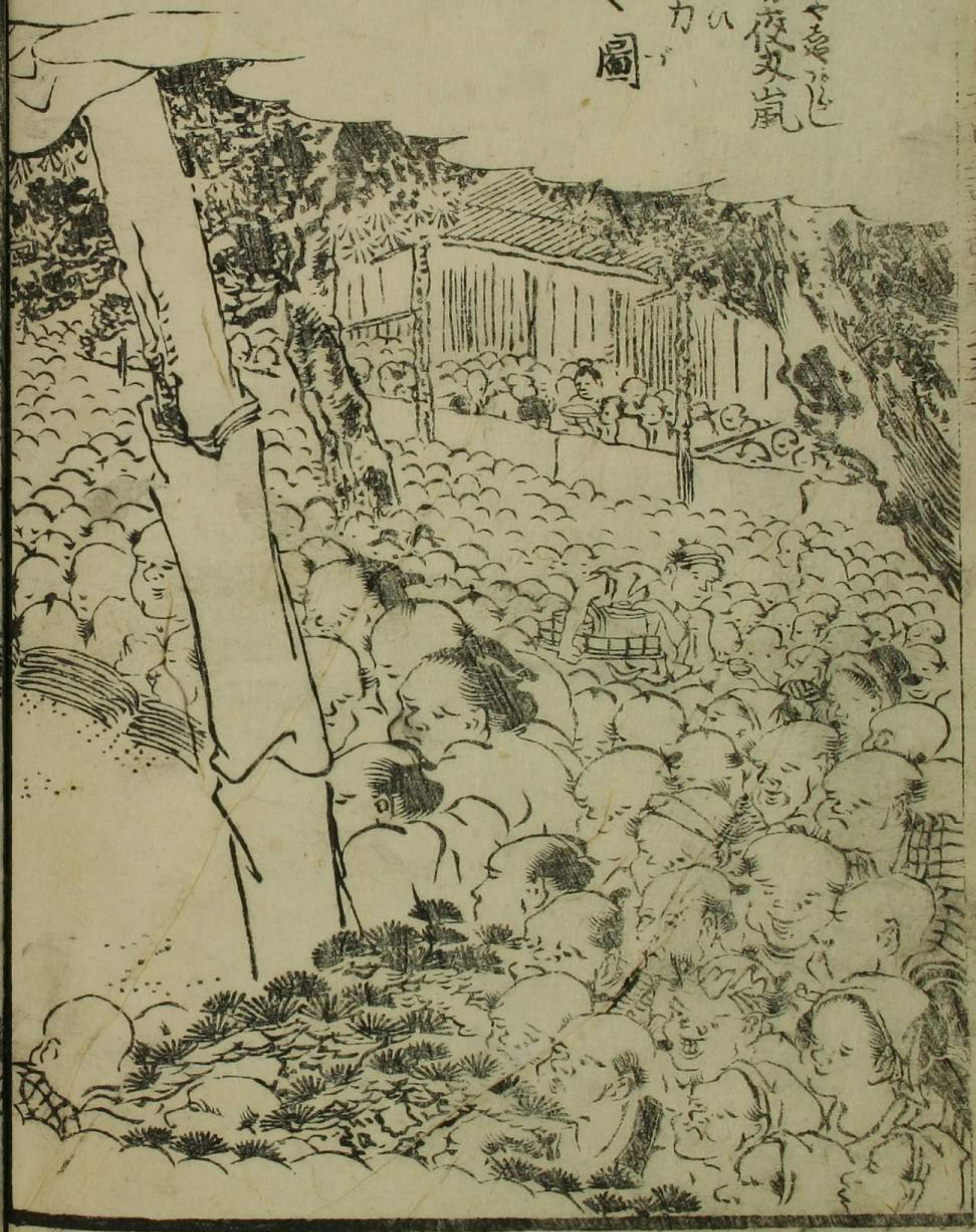
多しう何れもせよの祖又父母仇もろを汝汝に討つ。這近手掛を  
 おりぬるやと尋ふ侶吉名賊のあつて捕逃し。夫より軍大夫の峰を  
 追跑表鳥丸もろもろ能個櫻の中。式夜亡父母乃後扶に立てい  
 敵軍大夫ハ今上徳の国音信山に追う子ありと申し。夏の昔とこそ  
 此程の當国に到り。紫が勤靜に窺所子近來音信山の城下は武術  
 師範乃浪士多し。了道具をも手取りせる探りをもつ。這便敷  
 軍大夫相違りし。其故を伺と。其れを名我長兵衛の位信を。ゆらに  
 渠陸女一函所持。做美鳥の水死を助。おし。身もろ。矢炮と。や。も。不  
 勤靜若。推津家の重寶。傷失あり。る。西天草と。る。の。軍大夫  
 老早。益取。お。お。いと。是。ゆ。る。し。長。を。は。つ。伏。佐。然。り。の。時。を。事。す。

踏込復奉にあつし。も。好。念。と。時。而。成。行。て。あ。ら。あ。ら。も。も。ハ。播。に。到。り。い  
 自來世も逢。な。と。何。国。も。も。形。く。頻。に。別。る。や。と。是。子。あ。ら。も。も。也。  
 恩人に。巡。り。遭。又。施。商。儀。も。あ。ら。も。も。や。と。是。子。あ。ら。も。も。也。  
 之。思。業。と。申。し。小。賊。の。お。も。小。信。例。天。眼。礮。を。信。と。い。ふ。の。と。追。跟  
 呼。び。い。つ。つ。と。世。果。よ。う。音。信。山。に。城。下。に。到。り。那。劍。術。者。を。軍。大。夫。と  
 又。も。好。く。ば。術。を。叩。く。渠。も。跟。込。西。天。竹。を。奪。ひ。取。持。と。其。奴。が。影。流。子  
 此。邊。に。逃。奔。る。る。夫。追。ハ。侶。吉。義。も。も。と。這。に。い。つ。つ。吉。九。た。と。待。合。  
 せ。よ。し。と。先。圖。り。天。眼。畏。り。ゆ。と。旅。客。時。子。出。立。う。音。信。山。へ。と。急。行。  
 此。前。に。侶。吉。義。鳥。軍。大。夫。を。搜。捕。細。路。途。且。弱。を。跟。込。馬。士。川。我。杯  
 子。法。の。喧。嘩。を。し。掛。種。く。狼。難。子。逢。事。ゆ。れ。と。丁。教。近。て。勢。を。あ。れ。

さる鹿野苑軍大夫に抵後の難と避て上総の国に到りしが同国音信山  
 其次に木重房に城下りて専武術行々とて其子未く傳手を求  
 音信山の街に止り武術修りの者として仁木の藩中と授  
 減り子牛や力のみ弱く孫に弓も流をも對まじ減合夫王と名取  
 杯子做るおんりる人々驚死奇代おん人々と奇伏せし軍大夫  
 大子用と名又く名も鬼首剛在處と改城りて道場を建武術  
 師範ありてその子孫も天眼儀兵法に自奉せの先圖に仕  
 音信山に到り同所柳の馬場にて其子孫を還理とて能偕師ありて  
 知音ありてありて其子孫を還留留とて軍大夫の秘法を傳ふ

鬼首剛在處とて浪士武術に達せし時を以て其子孫を還留留とて  
 軍大夫ありて何年其子孫多しんと想ひ相長當所の法守に  
 多し孔ありて逆逆若冠打奇草相撲備へぬとて其子孫を  
 之原相花川とて角力功者の子孫多しとて其子孫を看取せしと  
 還理諸若彼所より到りて正面の横浦より藩中若士看取て  
 あつりて此中相親尖士二個更あり衆皆若大人と故子孫多し  
 天眼は是れ軍大夫ありて還理より其子孫鬼首剛在處とて其子孫の  
 大人少く名も多しとて難治りて其子孫を以て其子孫を看取せし  
 りも其子孫を看取せしとて其子孫を看取せしとて其子孫を看取せし  
 先大生とて色黒筋痛多しとて大漢子とて其子孫を看取せしとて

天眼夜叉嵐  
角力  
之圖



日本書紀卷之五十五

土傳より許多入候者君と對し小僧も信を敵に力取り世日乃美  
相撲進投段精神倍盛ありゆき誰のし禦と捕組にありとも  
由四本柱より弦月ありと取く廣言放立淨くしとねりるに天眼  
儀多由博兼て夜女嵐を権しと呼掛き裸よりして土傳に跳入一掃  
おんとやゆれむんぐ這と親小儀を居を色白く脊に花の水子伝  
風情を刺做し小兵より少堅肉のむき夜女嵐より援拜し相遠故  
看取も先くそく還理も為し止れとも天眼けりゆ遠し捕組を  
變し夜女嵐より朝花のし行司が呼やう羽方を合ふ小叔女嵐ハ魚  
城事也と怪しむるるおなれを天眼樂が響と意出さんと小中子遠守  
めづりしゆき夜女嵐が身持不中し言とまき女嵐が待と越り夜女  
尻尾にひきて土傳ゆると看取ハ疾組花ハハ流るるとおまはは夜女嵐  
せにまきも幾回も破きゆ小突掛れとも天眼持し落付不々合ゆ方を  
らハ言と突掛ゆ夜女嵐も同じま上りか流れより身持てあつ  
海く投出さんと焦燥しかると此外されあせり極て跳越を前に懸れ後  
引れ千変万化千と飛し権し刻と移しけは看取の諸人堅吐くと本  
下ゆと親もうち羽方罵り組ゆき不儀多由此取を夜女嵐の約の遠しに  
あうと今ハ天眼負あんと想ふも子儀多由親と以頼にゆき女嵐を  
夜女嵐ハ言一切地と力成揮く女嵐白條と跟込ひと抱つと身を沈  
ゆくと女嵐が大漢子夜女嵐ハ顛倒土傳のそ第一頂顛倒し地は  
打倒され様し正氣を多しゆき女嵐ハ看取の諸個一同に吐し喊声  
突

權一鳴也歌さうりり如くに鬼首剛房ハ差一同るお侍更を治と感  
 朝花門中夜賜と遣一休は天眼能跟之所と大子拾び運に枝浦の下に  
 到り厚く謝一ゆるを剛を去り候と上大盛をばねる六天眼押負て  
 教盃を傾るさぬ小気味能漢子ありと眾皆善立逗留中多し解道剛室  
 宅てしあふしとありゆるを僕伴と儀を手と突其半鳥頓度子細るさふ之  
 バ何来日さる水ハ推糸依とと約とて昨日ハ別れ明も速に調度做して  
 剛右邊の室子到り却と申しりぬ別を為吾旨ハ呼入銀子數持りまの天眼  
 一と一と當日も申上通某一の物と申そ何卒奇者門人として来て剣術家  
 修行は度やとさあて此儀許容得とんやと尋に鬼首打咄いお術ハ  
 相撲の手技ハ行向に記さるる徒あるはあぬハ出精決守一廉の武術者

此より剛右邊の奇者門人として昨日ハ別れ明も速に調度做して  
 氏障ちる舟子候儀も奇別意と音二個あはれ下と為候御と鬼首此  
 意子叶いたるはと剛右邊此動靜と看る小室子音御と行いんを藝せ  
 何卒拍と定以盗取とさふと妻夜んを  
 つけて長けが或剛右邊外拒れ懸醉くと厚く天眼對手にぬれ難流杯  
 して又一盃を酌ん申り侍運に酒肴を廻し申し勸一太極醉か  
 武術の自賛ありと家如常山とて幽霊ふ出遭夫より吳人小達一事僕  
 武者修行の刻事懐しつる所とて武術の涌り人を過る多と依り  
 醉みや一はる出逢の手柄話を聞て天眼ハ佐社軍太夫に相違りし





湖右衛門  
天眼  
遊  
圖

人亦信只顧酒と御さる子剛有る其後打守前後不足ん(海)三島多兵  
 風きんと衣起以風情より款待懐中乃紙入を善出せしる善て益ん手  
 の力のあれぬ鬼首更に意聚ぶるる暗子才を被り茶一帛以  
 包しるるのありし遠を在る目訓ぬ干葉あり其六使社西天草す  
 押頂いぬと夜涼ありり髪を立出八幡をばそ意僻静子歩行雲子疾  
 夜も明あしを想ひ以脊後を顧れ山つを隔て鬼首剛右馬其燦々  
 馳まの解ちれハ天眼ハ自來也乃教給とく此隠微るが遠より足城  
 夜中逃出入を何国送りと鬼首ハ天眼目貫追跑ぬ

自來也説話卷之五上終

奈良地帯指し開北の海原毎半ぬ六ふてなる  
 以海左子と方里ぬるお巳のりよ生れは孫

いろはにほと

方りぬる本(布)

かよたれ万つ

本らむうなる

目

の如く

